

Black Dogs EXTRA

Kuroneko Saku



Black Dogs EXTRA

文：黒ねこ作/表紙：雪あられ

登場人物一覧

【八倉直人】ヤグラ ナオト

モグリの義術医を営む青年で「暗殺者」の異名を持つ旧日本国防軍の特殊工作員。旧都『東京』では名の知れた義術医であり、傭兵の仕事も副業にこなす。サーニヤを妹のように見ており、彼女におねだりされるとつい甘やかしてしまう。そのせいで周囲にロリコン疑惑を掛けられているのが最近の悩み。

【サーニヤ】

『ブラックドッグズ』所属のロシア人の少女傭兵。

大戦中に軍の洗脳処置を受け、十四歳なのに精神年齢が六歳で止まっている。教えたことを素直に吸収する良い子&スニーキングと隠密行動の天才。純真かつ無邪気な性格で直人を「お兄ちゃん」と呼んで慕っている。

【レイヴン】

『ブラックドッグズ』に所属するフィリピン系の少女傭兵。

戦中、敵に陵辱されたサーニャを救つて以来、彼女の保護者になっている。

直人と友人以上恋人未満の曖昧な関係で付き合う理解者。

エルヴィの力量を認めている一方、直人を誘惑する恋敵として敵視している。

【エルヴィ】

『ブラックドッグズ』で長距離狙撃を担当するドイツ人の少女傭兵。

防弾仕様のメイド服を普段着にしており、日本語が堪能で頭の回転も早い。

直人に恋する健気な乙女で家事炊事はパーフェクトな腕前を持つ。

あらゆる手段を用いてライバルを排除する武装系メイドの鑑である。

■傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』

【神近梓】カミチカアズサ

傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』の女社長で「少佐」が通り名の女傭兵。旧日本国防陸軍で「走狗・走狗部隊」と呼ばれた第113特殊戦闘部隊を率いた。死神に愛された女、戦場の黒い猟犬、など同業者からは恐怖の対象とされている。どぶ沼に生活能力と常識と善心を丸ごと放り捨てたようなダメ人間の見本。

【久間 迅蜂】ヒサマジンパチ

『ブラックドッグズ』所属の傭兵で「白狼」の異名を持つ旧日本国防軍の元兵士。アルビノ特有の白髪、赤目な外見に加え、身長が一八〇センチもある大男。神近とは第三次大戦からの付き合いで、事あるごとに苦労させられている。ホットドッグが大好物で毎日欠かさず食しているホットドッグ中毒者。

■ 傭兵組合

【イレーナ・ウォーリア】

傭兵のお仕事仲介会社『傭兵組合』を経営する少女社長。

ロシア出身の十七歳であり、公平公正を掲げて健気に頑張っている。優れた商才と強運の持ち主だが、本人はまったくの無自覚。サーニヤの親友で良き相談相手となっている。

【御堂 翡翠】 ミドウ ヒスイ

『ブラックドッグズ』所属の傭兵で翡翠色の瞳を持つ日本人少女。

エルヴィの親友でレンジャー徽章を持つスカウトスナイパー。

直人の診療所に住み着き、ぐーたらな生活を注意されては嘆いている。「面白ければ全て良し」がモットーの傍迷惑なトラブルメーカー。

■ガールズバー『ブルースクエア』

【メリル・ギース】

ガールズバー『ブルースクエア』の看板娘&オーナーのアメリカ人美少女。持ち前の明るさと情に厚い性格から、客と部下の両方から愛されている。レイラとは長い付き合いで家族同然の信頼を置く相手。

【レイラ・キュイ】

『ブルースクエア』のバーメイド&用心棒のロシア系美人。

ポーカーフェイスが基本だが、男女問わず見惚れるほど容姿が美しい。メリルを溺愛しており、彼女に害を為す者は軍隊経験を生かして始末する。

【スミス・スターロン】

武器や装備、義術部品の修理加工を生業とするオレンジ髪の若者。直人の良き友人で二十ヶ国語を話せる語学達者なアメリカ出身の白人。元アメリカ陸軍の兵士であり、救いようのない女好き。メリルが目当てで『ブルースクエア』に足げく通う常連客。

■傭兵派遣会社『スカルオーダー』

【スカルオーダーの社員】

傭兵派遣会社『スカルオーダー』所属の強靱な鋼の肉体を持った男達。傭兵組合とは専属契約を結び、主にオフィスの警備などを請けている。海兵隊上がりの者が中核を占めるせい、ハードな訓練も慣れたもの。全員ムキムキボディのおっさんで、戦争帰りの屈強な元兵士達。

〔義術医療〕（ぎじゅついりょう）

損失した患部を人工部品へ置き換える代替医療。「義術」と省略するのが一般的。脳と脳幹を除く人体の九割を人工化させる全身義術化は俗にサイボーグ医療と呼ぶ。外科医の八倉甚により開発され、多くの難病患者や傷痍軍人の治療へ貢献した。義術化の施術や負傷箇所の修復などを行う専門医を『義術医』という。

〔特殊工作員〕（とくしゅこうさくいん）

軍情報部や参謀部に所属する非正規戦専門の工作員。諜報活動、要人暗殺、破壊工作、敵地潜入など分隊規模か単独で作戦行動に当たる。情報分析官のサポートを受け、諜報員と工作員の両方を兼ねて動く実動要員。日本国防軍にしかない兵種であり、海外では準軍事担当官と呼ばれる。

〔義術強化兵〕（ぎじゅつきょうかへい）

第四次大戦から登場した全身を義術化した兵士のこと。

「義術兵装」という軍用部品を使用しており、各部品に様々な機能を備えている。特殊部隊などに所属する兵士は、ハイスペックパーツを使用していることが多い。義術強化兵、義術強化猟兵、義術機甲兵、義術特殊兵の四種が存在する。

「すべてが失われようとも、まだ未来が残ってる」

作家

クリスチャン・ネステル・ボヴィー

プロローグ 子猫のフーガ

晩秋の夕暮れが廃墟の都を染めていた。

自身の荒い呼吸と非常階段へ響く足音を聞きながら、青年は金髪の少女を抱きかかえ、ひたすら上を目指して駆け上がる。少女の青い瞳は心配そうに揺れていた。

「お兄ちゃん苦しくない？ サーニャ降りる？」

踊り場で一度立ち止まった青年、八倉直人は深呼吸で息を整えて小さく笑んだ。

「……大丈夫。それより後ろは？」

「うんとねー……」

ガラスの失せた窓から吹き込む風雨へ曝され、打ちっばなしなコンクリート壁に亀裂が走っている。ここは廃墟のオフィスビルだ。地上二三〇メートル以上の高さを誇る超高層ビルというやつで、かつて「東京」が首都だった頃は六十階建だったらしい。

サーニャは「うんしょ」と肩越しに背後を覗き、吹き抜けから下を見通す。夕陽へ照らされた幼顔は真剣なのに、どことなくワクワクした雰囲気を感じていた。

「どうだ？」

「……あつ！ いたつ！ オジサンたち！」

タイミングや重さの違う靴音が、降り始めた雨のようなバラつき具合で聞こえてきた。「おあつ！」と素っ頓狂な少女の声が響き、直人が顔を顰めて逃走を再開する。

「——ったく！ ホントに、諦めの悪い連中だッ」

例の少女は大声で周囲を煽りながら駆り立てた。

「野郎ども！ 上だッ！ あの甲斐性無しをとっ捕まえれば何でも叶うぞおーッ！」
おっ！ と、むさ苦しい雄叫びが木霊して、男達が行軍スピードを速める。

「走れ走れッ！ 金づるを逃がすんじゃないやねえ！」

「女も酒も買ひ放題だ！ どんな手エ使っても逃がすなッ！」

「行け！ 進め！ クソ野郎のケツにキツイのを一発ぶち込んでやれ！」

異常なほど統制された掛け声に合わせ、どんどん足音が加速する。その影響で廃れた建物に微弱な揺れが発生する始末だ。当然、彼らが近づくほど震動は勢いを増していく。

ほっそりしたサーニヤの身体を抱え直し、直人は焦燥を顕わに悪態をついた。

「チッ。どいつもこいつも好き放題言いやがって——」

「お兄ちゃんはやくはやくっ！ 追いつかれちゃうっ！」

「わかってる！ ってか、何でそんな楽しそうなんだよッ？」

うーんと考えること数秒、彼女が屈託のない笑顔で答えた。

「わかんない！ でも、すっごく楽しいの！ ドキドキする！」

「そりやそうだ！ 絶体絶命のピンチだからな！」

階段をダンッと数段飛ばしで走り抜け、フロアを無視して上階を目指す。人数で有利な連中は各階を搜索しながら来ている。となれば、隠れてやり過ごす手は使えない。

だから、選択肢はひとつだけ。この無茶苦茶な「鬼ごっこ」の終了が宣言されるまで、ひたすら上へ逃げる。延々と続くような階段を踏破する他に選択肢はない。

もちろん、行き止まりに当たってもアウトである。

とことん、こっちに分の悪い勝負だな……。

突然、サーニヤが上着をぎゅっと掴み、くつつきそうなほど顔を近づける。

「大丈夫、サーニヤも最後まで一緒だよ」

「逃げ切れるとは限らないぞ。それに勝てる見込みだつてない」

「うん。絶対勝つもん」

「……味方はゼロ。ここからの脱出も不可能だし、外部の支援だつて期待できない。タイムリミットまで十分以上あるのに後ろは敵だらけ。しかも、一番の危険人物が先に潜んでるかもしれないぞ。あるいはトラップとかな。こんな状況でも勝てるつて？」

「うん。お兄ちゃんとなら勝てるもん」

「……………」

きつと勝算を裏付ける根拠など、どこにもない。でも、彼女が言うだけで不思議と勝てるような気がしてくる。カードはすでに運命の手によつて混ぜられた。

だったら、あとは信じて勝負するしかない。

サーニヤは小さな手で直人の頬にそつと触れた。

「じゃあ、勝つたらぎゅつとしてあげる。サーニヤからごほうびだよ」

「……ありがとよ。スピード上げるぞ！」

「うん！」

あらゆる出来事には原因があるという。仮にそうだとしたら、彼女が「鬼ごっこ」をしたいと言いだした日から、この時この瞬間は因果律で定められていたのかもしれない。

直人は、やれやれと苦笑混じりに胸中で独り語ちる。

Black Dogs EXTRA

——まったく、どうしてこんなことになったんだか。

第一章 サバイバル鬼ごっこ

——義術により脳以外を人工化した人類が当たり前となった時代。世界的な都市の大半が瓦礫と廃墟に変わっても、そこから人々の営みが消えてなくなることはなかった。

そろそろ、秋の終わりが近づいた昼前のことだった。

タブレット画面の電子カルテにタッチペンを走らせ、直人は椅子を右へ向ける。午前中最後の患者であり、今日が初診となる男へ手を差し出した。

「八倉直人だ。よろしくな」

スラブ系の男はやや呆気にとられ、彫りの深い顔へ曖昧な笑みを作って握り返した。

そんな顔をされる理由には、少なからず心当たりがある。むしろ、ありすぎて少々頭が痛いぐらいだ。まあ、こういう反応も今ではすっかり慣れてしまったわけだが。

まずは警戒心をほぐそうと、直人は目元と声色をできるだけ和らげた。

「俺の本業は義術医なんだ。たぶん、あんたらの界限じゃ元特殊工作員の傭兵ってほうが通じると思うけど。今は忘れてくれ。ここにいる俺は医者だ。オーケー？」

男もそれなりに危ない橋を渡ってきたんだろう。その嗅覚が安全だと判断したらしい。とりあえず、身構えることを止め、商談を始めるような口ぶりで喋り始めた。

こうなるとかなりスムーズになる。一先ず話を遮らず聞き役へ徹しておき、相手の話が一区切りついたところで、机の端に用意した烏龍茶の缶を渡した。

カルテを数行書き加え、直人はくるくるとペンを弄ぶ。

「……さて、俺達『義術医』は『義術医療』の普及で登場した医者だ。一般にサイボーグ医療なんて呼ばれてるアレだよ。ま、人体に詳しい特殊なお医者さんと思えばいい」

西暦二〇四二年現在、義術化した人間は世界中に巨万といた。

手足や臓器を始めとして、今の人類は肉体の九割を人工部品へと置き換えられる。

これにより、老いや病による死者は急速に減り、先天性の障害ですら大半を克服できる時代となった。そうした肉体の人工化を『義術医療』あるいは『義術』と呼んでいる。

「でも、脳や脳幹は生身のままで。どんな頑丈な義術強化兵の軍人や警官だって、そこをやられちまったらお終いさ。でも、それ以外なら俺達が施術で修復できるわけだ」

どんなに頑強な体でも欠損するし、年月が経てば脆くなる。全身を義術化したところで完全になれるわけじゃない。

だからこそ、専門の医者——義術医がいるのだ。

男は股の間で烏龍茶の缶を握り、物言いたげな顔をしていた。そういう態度も飽きれるほど見慣れている。直人は「じゃ、本題に入ろうか」とペン回しを止めた。

「義術医にも免許があつてね。義術医師免許って国家資格だ。あんた、俺のところに来たのは初めてだろ？ だから、こういう話が必要なんだよ」

医者に医師免許があるように、義術医にも正式な免許がある。

直人に義術医の技と知識を叩き込んだのは、ある天才的な腕を持った女医だ。半年以上前から行き先もわからない旅へ出た彼女は、教え子に嫌そうな顔で言ったものだ。

「義術医師免許？ あんなの試験勉強できるお金持ちなら取れるわよ？ 人間性がゲスで腕が三流でもね。つまり、ICチップの付いた合成樹脂のか・ぎ・り。わかった？」

たぶん、免許があつたところで、真つ当かつ腕が良いとは限らない。そう伝えたかつたんだらう。ただ、やけに刺々しい口調だったし、過去に何かあつたのかもしれない。

まあ、あの女医の昔話はさておき、その「飾り」を担保に患者は信頼をおくものだ。直人が両目を細め、真面目な顔つきで告げた。

「あんたの身体を直すだけの腕は保証する。でも、俺は「もぐり」の義術医だ。だから、俺に任せるかどうかは自分で決めてくれ。あんたの身体のことだからな」

十数分後、窓から男を見送り、直人は電子カルテに施術予定日を記入した。その時、小さな物音が聞こえ、怪訝な顔つきでドアを見る。これで午前中の患者は最後のはずだ。

すると半分ほどドアが開き、サーニヤがひよこつと顔を覗かせた。サファイアのように鮮やかな青い瞳を輝かせ、じいっつと様子を窺がっていた。

「……お兄ちゃん。お仕事、終わった？」

彼女の黒いパーカーはフードに猫耳が付いている。おかげで、今の姿は猫じゃらしで遊んで欲しい子猫のように見えて仕方がない。そういうところが彼女の可愛いさだと思う。ペンを置き、直人は微笑を湛える。

「午前中はね。でも、午後から——」

「ホント!? じゃあ、サーニヤとあそぼっ！」

サーニヤは飛び出すなり、直人の目の前にある患者用の丸椅子へ乗った。

キイキイと喧しい椅子を回し、「はやくはやくっ！」と両足をふらふら前後へ揺らす。こうなると散歩をねだる子犬に喩えたほうが、しつくりくるかもしれない。彼女の背中では左右に行き来する尻尾を幻視して静かに笑った。

「レイヴンはどうしたんだ？」

「今日もアズサに呼ばれたんだって。レイヴンだったらずるいんだよ？ 昨日ね、明日は遊んでくれるって言ったのに、さっきエルヴィとお仕事だからダメって！」

「仕事？ ああはいはい。なんか昨日、夜に愚痴ってたなあ……」

この診療所兼自宅には、サーニヤを含めた四人の同居人がいる。

出身地や境遇、性格もバラバラな少女達。彼女達の共通点は、第四次大戦中に「外人部隊」味方から押揃された、日本国防陸軍の特殊部隊へ身を置いたことだろう。

あの苛酷な大戦の終結から一年半、少女達は軍籍を捨て、戦中に放棄された日本の旧首都『東京』で傭兵を生業にしながら日々を生きている。

ちなみに、その中でサーニヤは一番幼い。

レイヴンに敵の略奪現場から救われ、旧日本国防軍へ彼女は保護された。

ところが、軍本部は保護の代償として、サーニヤを実験道具に使った。全身を義術化して作り直し、『記憶洗浄処置』という方法で、理想的な兵士の精神構造へ組み変える。

当時から禁忌とされた医療技術の後遺症は重い。

サーニヤは肉体的に十四歳だが、精神年齢は六歳のままと止めている。それに加え、過去の記憶も一切なかった。だから幸か不幸か、辛く悲しい記憶も残っていない。

……ただ、それは果たして幸せなことなんだろうか？

「お兄ちゃん？」

サーニヤの声で現実へと意識を戻し、直人は申し訳なさそうに後ろ頭を掻いた。

「ごめんな、サーニヤ。遊んであげたいのは山々なんだけど……」

この後も予定はみつちりだ。患者宅二件を回診のために訪問してから、義術部品や麻酔を仕入れるべく、露店市場まで足を運ばなきゃならない。

サーニヤは眉間をきゅつと寄せ、拗ねたように唇を尖らせる。

「むう。お兄ちゃんもサーニヤと遊んでくれないんだ」

ぷくうと膨れる彼女を空いた手で撫でてやる。さらりとした柔らかい金髪を梳き、小さな頭から伝わる不満感に苦笑した。やれやれ、そういう言い方をされるとな。

「ちよつとだけだぞ？ 何して遊びたいんだ？」

彼女がぱつと表情を明るくさせ、

「鬼ごっこ！」

「えっ？ 二人で？」

「うん。サーニヤね、鬼ごっここのタツジンなんだよ。だから、お兄ちゃんはなんにも心配しなくていいの！ サーニヤが鬼ごっここのゴクイをデンジュしてあげる！」

えっへんと彼女は小さな胸を得意げに張る。

うん、おかしいぞ。俺の知ってる鬼ごっこって、そんな変な遊びじゃない。少なくとも極意とか伝授なんて要素は——いや、ちよつと待った。

あからさまに間違ったことを教えるロクデナシが一人いるじゃないか……。
「ふっふっふ、お困りのようだね。八倉君？」

ほぼ予想通りの声がドアからしたので、思いつきり溜息をついてやった。

「……どこかのサブカル脳が、無垢な子供にアホなことを吹き込んでるせいだよ」
「そっかあ。どこの誰か知らないけど困った人がいるんだねえ」

「お前のことだよ、御堂！ 気づけよ！」

御堂翡翠は、セミロングの黒髪へ映える翡翠色の瞳に悪戯っぽさを湛え、大欠伸を噛み殺していた。愛用の枕を小脇に抱え、牛柄なパジャマ姿のままカラカラと笑う。

「まあまあ。何事も楽しく学んでこそ意味があるって言うじゃん？」

「もつともらしいことを言って誤魔化すんじゃない。……ってか、仕事が休みだからっていつまでも寝てんじやねえよ。今、昼だぞ？」

「はいはい。もう、八倉君ってお母さんみたいだね。というか、おかん？」

「誰のせいだと思ってるんだ？」

「んー？ 風当たりの強い世の中？」

「……お前のせいだ。何でも世の中のせいにするんじゃない」

御堂はブラックドッグズに所属する傭兵の一人で、その仕事は『傭兵組合』の社長を必要に応じて護衛することだ。だから、ちよつとばかり労働スタイルが変則的らしい。

……とにかく、今のうちに根本的な間違いは正さなきゃダメだな。

サーニヤのきよとんとした顔へ向き直る。

「いいか、サーニヤ。鬼ごっこってのは誰でも遊べる普通の遊びなんだ」

「ほえ？ そうなの？ ヒスイが鬼ごっこは「シヨギョウムジョウ！ オニから逃げ切らないと終わらないですげーむ」って言ってたよ？」

「うん、待ちなさい。おかしいからな？ 鬼ごっこは鬼が逃げてる人をタッチするだけ！ そしたら鬼を交代！ なんで、鬼に捕まると死ぬルールになつてんだ……」

「それでね、もしも捕まりそうになったら、オニの目をつぶして逃げるの」

「アグレッシブすぎんだろ!?! そういう反則はやっちゃダメ！」

「でも、いっーぱい、シュギョウすれば大丈夫なんだつて！ だから、サーニヤも毎日オニから逃げるシュギョウしてタツジンになったの！ すごいでしょ？」

彼女が物欲しげにじつと待っている。無視するわけにもいかず、よくわからない努力を褒めるために頭を撫でながら、直人は満面の笑みを浮かべて御堂を見据えた。

「おい、御堂」

「なにかな？」

「来週まで晩飯のデザート抜き」

「ひどいっ!?! 私が何をしたらと!」

「黙って反省しろ。それとも、家事炊事当番一ヶ月の刑がいいのか？」

「ちえっ。何さ。日本全国に増え過ぎた「佐々木」の姓を抹殺するため、政府が大量に放った鬼から追われる小説『サイバイバル鬼ごっこ』のルールを教えただけじゃん……」

「だけじゃねえよ！ 明らかに普通じゃないだろそれ！」

最近、サーニヤの遊び相手は御堂なことが多い。毎日のように依頼が舞い込んでくるおかげで、直人とて常にかまってはやれない。そういう意味で彼女の存在はありがたい。

ただ、楽しいことなら見境なしの悪戯好きな性格だけは困りものだ。
机の置時計へ視線をやり、直人がタブレットの電源を落とす。

「……つと、まずいな。そろそろ、行かないと」

「もう行っちゃうの？ まだ、遊んでないのに……」

「俺の代わりに御堂が遊んでくれるから。……御堂？ わかってるよな？」

「うっ、凄まじいプレッシャーが！ なーんてね。はいはい、心配無用だつて」

「……さっきのアレで心配にならないほうがおかしいだろ。」

直人は白衣を椅子の背に引つ掛け、上着を羽織りながら嘆息する。事務机の脇にある黒いトランクケースを掴み、サーニヤと視線を合わせるためにしやがんだ。

「ごめんな。明後日はなんにもないから」

「……ホント？」

「ホントだよ。レイヴン達も入れて遊ぼうな」

「うん。約束だよ？」

ぽんぽんと頭を撫でてから立ち上ったとき、御堂が片目を瞑っていた。

「ま、大船に乗ったつもりで留守は任せなさい」

「どう見ても泥舟っぽいから普通に留守番してろ……」

「ちよつとは信用してよっ！」

いつてらっしやくい！ と、サーニヤに見送られて部屋を出た。すぐさま思考を仕事の配分へ切り替える。そのせいで、御堂の不穏な一言を、直人は完全に聞き逃していた。

「ねえ、サーニヤ？ みんなで楽しい「鬼ごっこ」をやってみたくない？」

サーニヤと約束した日。

窓から外を見下ろし、直人が額へ手を当てた。

「いつたい、何が始まったんだ……」

いつも通り、リビングの窓から殺伐とした廃墟の荒野が広がっていた。人の失せたビル群が墓標のごとく聳え、狼煙じみた黒い煙が透き通った秋空へ昇っては消えていく。

ちなみに、これは遠目に見た景色の話である。

診療所の前は、普段と大違いだ。型落ちの装甲車から鉄の骨組みや大型通信機、アンテナなどを下ろし、堅気じやない男達がそれらを組み上げていたりする。

挙句、運動会とか町内会行事で使われそうなテントが数箇所立っていた。

電動工具でナットを締める耳障りな音が鳴り、野太い掛け声に合わせて、汚れた軍用色の天幕を張ったテントが次々と組み上がる。正直、ワケがわからない。

「あのさ、ナオト」

直人の右隣でフィリピン系の少女が固まっていた。綺麗な褐色肌の肉体は無駄なく引締まっている反面、野戦服越しでも目のやり場に困るほど胸が豊かだ。艶がかった黒髪は、単に邪魔にならない長さで刈ったようなショートカット。アーモンド型の瞳は豹のような獣を彷彿とさせるものの、今は猫騙しを食らって驚く家猫のごとく真ん丸だった。

「……これなに？」

「悪いな、レイヴン。俺にもさっぱりだ」

すると左隣から、銀髪の少女がするりと割り込んだ。

「二人揃って何を見てるんで……」

エーゲ海のような穏やかで美しい碧眼をぱちくりとさせた。彼女のフレンチ風なモノクロのメイド服は、白磁器じみた白い肌によく映える。スレンダーなスタイルとは裏腹に、丈の短いスカートから大胆に露出した太股はむっちりとした色っぽい。彼女の几帳面かつマメな性格を現したように、くせつ毛が少々多めの髪は肩上で切り揃えてあった。

彼女は数秒の沈黙を経てから、直人へ困り顔を見せた。

「あの、これは……何が始まるんです？」

「……むしろ、俺が知りたいくらいだよ。エルヴィ、何か聞いてないか？」

「いえ。まったく何にも……」

「レイヴンは？」

例の機材と男達を載せたトラックが現れたのは三十分ほど前。朝食後、サーニヤと出かける話を二人に聞かせたとき、テントや機器の組み立てがいきなり始まったのだ。

上着のポケットへ両手を突っ込み、レイヴンは「お手上げ」と肩をわずかに上げる。

「知らない。もし、知ってたら話してる」

それもそうだ。だいたい、知ってるなら驚くはずもない。どこの誰とも知らない連中が何かの準備を始めている。この状況でわかっていることはそれだけだ。

いきなり、キーンと不快な拡声器の音割れがした。三人で顔を顰めたとき、どこかで聞き覚えがあるハスキーボイスの女声が一带に大声を響かせる。

『いいかッ！ クソを垂れる前と後にサーをつける！ 分かったか、ウジ虫どもッ！』

「「イエッサーー！」」

『よーし、グズグズするなウジ虫ども！ さっさと運んで組み立てろ！ お友達の彼女に小汚いナニをぶち込むより早くやれ！ 分かったか！』

「イエッサーー！」

『ふざけるな！ 大声だせ！ タマ落としたかッ！』

「「「「イエッサーッー！」「」」」」

……いつから、ここはアメリカ海兵隊の訓練キャンプになったんだ？

男達の中心で先任軍曹よろしく罵倒か命令か、ほとんど区別のつかない指示をノリノリで出している女がいる。黒いストレートな後ろ髪を背の中程で束ね、旧日本国防陸軍の野戦服に濃緑の軍用コートを羽織り、上着の襟に少佐の階級章を付けた元軍人――。

ほとほと嫌そうな表情で、直人は深々と息を吐いた。

「さて、二人とも。今、間違いなく言えることがひとつあるよな」

「……そうですね」

「……うん」

傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』の社長であり、「少佐」という通名で都内に知られる最凶最悪の女傭兵――神近梓が関わっている。それが意味することは何か？

一〇〇パーセント、ロクでもないことが起きようとしているッ！

あのダメ人間の鑑、生ける粗大ゴミ、不死身のロクデナシとでも言うべき、神近が進んで陣頭指揮を執っている以上、穏やかな休日には死んだ！ いや、これから死ぬ……。

直人が左右へ目をやれば、二人とも行き着いた結論は同じらしい。

ゆつくり窓から離れ、忍び足で廊下へ向かう。表玄関はダメだ。テントやら機材で埋まっている。そうなると非常階段のある裏口から出て、全速力で逃走を図るしかない。

ところが、珍しく早起きな人物のせいで逃走計画は潰えた。御堂が非常階段のドアを仁王立ちで阻み、ニヤニヤと妙に腹の立つ悪役じみた顔つきで待っている。

「おやおやおや？ 三人仲良くどこに行こうとしているのかな？ まさか、サーニヤと遊ぶ約束をすっぽかしてデート……とか？ ねえ、八倉君」

「……くっ、御堂。お前も一枚噛んでるわけだ」

深緑の軍用パーカーに黒のミニスカート、神近の率いた部隊章パッチを付けたグリーンベレー帽を被った彼女は、わざとらしい口笛を吹きながらうそぶいた。

「ええ、何のことだか全っ然わっかんない」

「レイヴン、エルヴィ。表から強行突破するぞ」

「了解。意地でも逃げ切る」

「……あまり気は進みませんが、それしかなさそうですね」

と、三人が踵を返した先を、サーニヤが頬を膨らませて立ち塞がる。

「お兄ちゃん達どこ行くの？」

「えっ!? それはその……」

「お兄ちゃん。今日はサーニヤと遊んでくれるって約束したもん」

「いや、まあうん……」

彼女の「うそつき」と言いたげな視線が突き刺さる。約束していた手前、この場で覆すのは裏切りに等しい。何より、無垢な瞳に訴えられると罪悪感が割増しで圧しかかる。

「……約束したもん」

「八倉君。約束を守るのは大切だよねえ？　なら、サーニヤとの約束だって守らなきゃ良くないと思うんだよ。ほら、私だってデザート抜きで我慢してるし？　ねえ？」

それは、ただの自業自得だろ。

とはいえ、御堂の言葉は正しい。約束は簡単に破るべきじゃないし、サーニヤを落胆させて休日を守るのは何か違う。レイヴン達も「諦める」と首を横へ振る。

サーニヤの前へ屈み、直人が微苦笑を見せた。

「わかったわかった。俺達が悪かった。そういう約束だしな」

ようやく笑顔へ戻ったサーニヤを撫でつつ、人の後ろでニヤける天邪鬼を睨んだ。

「……ただし、何をする気だったのかは聞かなきゃな。二人とも？」

エルヴィが両手にナツクルを付け、背筋の凍るような笑みを張りつけた。

「はい。少佐殿と何を企んでいるのか……私、気になります」

「ひいっ！　や、やだなあもう！　これっぽっちも企んでないってば……」

「それは身体に直接訊いてみればわかるから。ねえ、レイヴン」

「同感」

レイヴンが御堂の背後へ回り、ヘッドロックで締め上げる。格闘戦の得意な彼女の絞め技は強力だ。アレに意識を落とされかけた経験は、直人として一度や二度じゃない。

「……ヒスイ。私も仲間に本気を出したくない」

「ちよっ、ちよっと待って!? 暴力反対っ! ね?」

「ナオト?」

「御堂。おやつも抜きにされたいのか?」

「この人でなし! 甲斐性なし! 天然女誑し!」

「よし、二人とも存分にやれ」

「八倉君の鬼いっ! ムツツリスケべっ!」

「吐くまでシメ上げろ!」

あわやというところで、「そこまでにしときな」と階段を上がった神近が止めた。ビター
チヨコレートへ似た香りの葉巻煙草を啜え、少々呆れ混じりに眉根を寄せる。

「……あのねえ。別に知りたけりや、翡翠をシメなくても教えてあげるよ」

「少佐あ! 助かりましたよう……」

神近は御堂を一瞥し、人を食ったような笑みを見せるなり手の平を返した。

「ま、あたしも翡翠の話を断片的にしか聞いてないけどね」

「……え? あれ? 少佐?」

「レイヴン。やれ」

「ぐえっ!? ちよっ、レイヴン!?! 絞まってる、ホントに絞まつ、むぎゆう……」

「まだまだ。ここからが本番」

「さあ、翡翠! キリキリ吐かないと終わりませんよ!」

こつてり絞られる小悪党を無視して、美味そうに一服している神近へ目をやった。

「んで? 何をやらかすつもりだ?」

「なあと、大したことじゃないよ」

神近がくつくつと喉奥を震わせた。コートの上横にナイフを咥えたシベリアンハスキーの描かれた部隊章がある。彼女が戦中に率いた『第113特殊戦闘部隊』が実在した証であり、傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』の名を廃都に知らしめる象徴でもある。

彼女がニヤリとした拍子に覗いた犬歯は、狼犬の歯牙のごとく鋭い。

「ちよいと大掛かりで愉快なゲームをするのさ。演習風にね」

「演習風のゲーム？」

直人の袖をくいくいと引き、サーニヤがにつこりとした。

「みんなでサーニヤの考えた鬼ごっこをするの！」

装甲車の上から三十名を見下ろし、御堂は涙目で喉下を擦った。

「げほっげほ！　うう喉痛え……それじゃ、始めるよ」

コホンと咳払いをひとつ。拡声器を片手に大きく息を吸い――。

『ドキッ！　クソ野郎だらけのサバイバル鬼ごっこ！　ルール説明く！』

「Ye a h！」

神近を除く女性陣が、やたら野太い雄叫びを前に引き気味で顔を顰める。

診療所前に集合した三十人中、二十五人が「男」なのだ。しかも、各国の軍隊で鍛え上

げられた筋肉の塊じみたムキムキのマッチョ野郎ばかり。むさ苦しさも倍増である。

例の男達は傭兵派遣会社『スカルオーダー』の社員だ。彼らは『傭兵組合』と専属契約を結んでおり、社屋の警備や重役の護衛を主な業務としていた。

ちなみに、『ブラックドッグズ』も専属契約社だが、アクの強い利用者達に対する「抑止力」と「保険」が主な目的で、その調整と補佐役で出向中なのが御堂であった。

彼らは苛酷な戦場を生き抜いた屈強なベテランである。

しかし、装甲車の前に立っている白髪で赤眼の大男——久間迅蜂の頑強さと比較したら大したことはない。傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』所属の人間装甲車。

久間の髪色や瞳は全身義術化以前からのもので、本人曰く先天性のアルビノだという。ただし、野戦服越しにもわかるほど太い四肢は、鍛えてつけた筋肉の塊であった。

御堂が呆れ気味に頬を搔く。

『ルール説明……始めたいんだけどなあ……』

戦中、「白狼」という異名で知られた旧国防陸軍の義術強化兵は、さつきから大好物のホツトドッグを口いっぱい頬張り、満ち足りた表情で平らげていた。

『……あのか、大尉？』

もぐもぐ、ごつくん。全員の視線が集まる中、我関せずで食事をする人間装甲車。くしやつと包みを丸め、ケチャップのついた親指を舐める。

頭痛を堪えるように額へ手をやり、御堂は盛大な溜息をついた。

『久間大尉？ ご飯食べるのはいんどさあ……』

「なんだ？ うん？ ……そうか、すまん。各自、端末の用意を。ルールを配る」襟足を束ねた後ろ頭を搔き、大きな手で小型端末の画面を器用にタップする。

あちこちで受信を通知する電子音が鳴り、直人のデータボックスにも文書ファイルが送られてきた。ダンロードしたファイルには、八つのルールが書かれている。

- ルール 1 制限時間は一〇・〇〇時から一七・〇〇時までとする。
- ルール 2 ファイルドは本部から約六キロ圏内とする。
- ルール 3 追跡者、逃亡者への殺人行為は禁止とする。
- ルール 4 死人の出る装備は使用禁止。(それ以外の道具は可)
- ルール 5 追跡者は逃亡者にマーカーを付けたら「タッチ」したものとする。
- ルール 6 逃亡者は自分の通信機を壊してはならない。
- ルール 7 想定外の事態が起きた場合は本部内の多数決で可否を決める。
- ルール 8 勝者には無理の無い範囲で望んだ賞品を与える。

「驚いたな。わりとマトモだ……」

神近が関与してる時点で、とんでもないゲームになる。そう思って覚悟してただけに、拍子抜けするほど真つ当な内容だ。ちよこちよこ「鬼ごっこ」に不釣合いな単語もあるが、神近が言うところの「演習風」として読むなら納得できなくもない。

サーニヤがフィールドジャケットの右袖を引つ張った。

「ルールはね、サーニヤと一緒にイレーナが作ってくれたんだよ。アズサとヒスイも考えてくれたんだけど、イレーナが「難しいからダメ」って言ってた」

ああ、なるほど。そりゃマトモになるはずだ。

イレーナ・ウオーリアは『傭兵組合』の社長を務める金髪の少女だ。藍色のダツフルコートに羽織り、チェック柄なミニスカートを穿く彼女が、ちょうど久間の左隣にいる。彼女はサーニヤと同じロシア人で、この廃都では数少ない常識人である。

サーニヤには濁して教えているが、たぶん、彼女なりに神近の悪巧みを阻止してくれたに違いない。もし、神近に任せたら子供の遊びも一瞬でデスゲームへと早変わりだ。ちよつと想像しただけでも激しく頭の痛い事態になりかねない。

ともあれ、二人の考えたルールなら安心だ。

イレーナが御堂に呼ばれ、彼女の手を借りて装甲車へ攀じ登る。大勢の視線に緊張しながら拡声器を持って喋り出した。

『こ、これからサバイバル鬼ごつこの、えつと、基本説明を始めます……』

「イレーナっ！ がんばって〜！」

サーニヤの声援に気がつき、彼女はぎこちないながらも笑みを返す。

『このゲームは基地から逃亡した兵士を捕まえるイメージのゲームです。『逃亡者』は、脱走兵として『追跡者』から逃げ延びなきやいけません。『追跡者』は、タイムリミットまでに逃亡者を全員捕まえると勝ちです。これが基本ルールになります』

直人がげんなりした顔で呟いた。

「……なんというか、やたらハードなテーマだな」

特殊工作員時代、脱走兵狩りをする部隊との遭遇戦で苦勞し、実際に脱走も経験した身としては嫌な記憶しかない。軍警察と情報部の執拗な追跡を警戒し、心身をすり減らしながら続ける逃亡生活は、いつまで経っても忘れられない最低の思い出であった。

終戦間際、混乱した状況で軍を離脱した連中は大勢いる。久間を除けば『ブラックドッグズ』の面々だつて全員、脱走兵だ。そうなつた経緯には色々な理由がある。独り暗澹とした記憶に辟易とする中、イレーナの緊張気味な説明は続いていた。

『それぞれ、逃亡者と追跡者はくじ引きで決めます。制限時間は七時間。一七・〇〇時になつたら、本部が終了宣言をします。あつ、すみません！ 最初に皆さんへ通信機をお渡しするんです！ それで、逃亡者と追跡者は本部と連絡が取れます……』

「ん？ 相互に連絡を取れる状態にするのか？ それだと逃亡者が連携したら、追跡者を攪乱するだけで逃げ切れるんじゃない？」

「ううん。オニの人たちしかつーしんきでお話できないの」

「こちらの独り言を聞いていたらしい。サーニヤと視線を合わせるべく体を屈めた。」

「うん。オニにタッチされた人は、お話できるようにしてもらえるんだよ。でも、オニじゃない人は、イレーナ達のお話を聞いたりしかできないの」

「そういうことか。逃亡者は互いの位置も状況もわからない。だが、次々と減っていく仲間と追跡者の数だけは教えられ、その状況下で連携する追つ手から逃げ続けるわけだ。」

『え、えーとですね……追跡者は二人からスタートになります。追跡者は逃亡者へマーカ―を付ければ捕獲完了。新しい追跡者として人数を増やすことが可能です』

御堂が『これがマーカ―』と赤い球を掲げる。

マーカ―の大きさは卓球ボールぐらい。握るだけで手に隠せるし、いざ投げつける際も最低限の動きだけでこと足りる。そこそこ厄介な代物だ。

加えて、初期の人数比が14対1と差が大きいことも気になる。人数を後で増やせるとはいえ、六キロ圏内の逃亡者を全て捕まえるには時間が足りないんじゃないだろうか。イレーナは端末の画面を見せ、ざわつく聴衆へ捕捉した。

『追跡者は逃亡者の位置を一時間に一回だけ把握できます。でも、どこに誰がいるのかまではわかりません。なので、通信で連携しながら逃亡者を捕まえてください』

——なるほど。通信機のGPS情報を送るわけだ。

追跡者は一時間に一度、渡された位置情報から作戦を考え、仲間を増やしつつ逃亡者を追い詰めていく。このゲーム、単純に「追いかける」だけじゃ勝てなさそうだ。

しつかり、敵の行動パターンを読み、頭を使って動けということらしい。

拡声器を持ち変え、御堂は右拳を突き上げた。

『はいはい。そんじや、小難しい説明はこの辺で終わり！みんなが知りたい賞品の話をしようじゃあないか！これから紙を配るから、自分の欲しい賞品を書いてね。こっちでチェックするけど無茶苦茶な賞品はダメだよ！』

そういうえばルールにもあった。無理のない範囲で望んだ賞品を与える。例えば一生遊んで暮らせる金が欲しい、とかは無理なことだ。ま、そんなことを書くヤツは——。

神近が露骨な舌打ちとともに肩を落とした。

「なんてっこった。せつかく、一生遊んで暮らせる金って書こうとしたのに」

あんた、チェックされなきゃ書くつもりだったのか……。

「はいっ！ 私の持つてる箱に書いた紙を入れてね？」

ちよつと幼さを感じる少女の明るい声。どこかで、聞き覚えがあるような？ そう思った矢先、オレンジ髪をオールバックにした若者が「よお、親友」と件の紙を配る。

「お前、ここで何やってんだ？」

着古したジーンズ姿のアメリカ人。アニメチックなパッチを付けた黒いフライトジャケツトのポケットを探り、スミス・スターロンは「見ての通りさ」と両肩を竦める。

「紙とペンを配ってる」

「……どうして、ここで紙とペンを配るボランテアをしてるのかを訊いたんだよ」

スミスは都内で修理屋を営む四歳上の友人だ。

武器に精通しており、義術部品の加工や調整もできるうえ、二十カ国の言葉を喋れる語学達人な面もある。大戦中はアメリカ陸軍の兵士だったらしい。

スミスがポケットから煙草の箱を出し、一本抜いて啜えた。アメリカンスピリットのウルトラライト。オレンジの箱が特徴の無添加煙草で、スミスのお気に入りだった。

「わかってるって。ほれ、色々と機材を使うだろ？ まあ、あとは……」

と、紙を回収する少女を指差す。ブラウンの革ジャンと白いホットパンツ。ツインテールにした金髪を揺らし、レイヴン達の紙を回収した彼女が手を振っていた。

「やっほー、ドクター」

メリル・ギースが彫刻じみた美貌のバーメイドを連れて立ち止まる。

「ほらほら、ドクター？ 欲望に従ってばばつと書いちゃって！ あたしの店を一日貸切りにして、可愛い女の子達といちゃいちゃしたい！ とかでもいいんだよ？」

「あのなあ……」

メリルは『ブルースクエア』というガールズバーのオーナーをしている。

明るく陽気な彼女が看板娘を兼ねているおかげか、この辺でブルースクエアを知らない者は少ない。ちなみに、スマスは彼女を目当てに店へ通う常連客だ。

メリルに「お願い」されてホイホイついて来たというのがオチだろう。

案の定、スマスが情けない顔でしよげていた。

「……マジかよ。それがアリなら俺も参加すりゃよかった……」

「スマス君はだーめ。でも、手伝ってくれてるし、ちよつとサービスしてあげるね」

「しゃあっ！ メンテでも何でもやったらうじゃねえか！」

彼女は本当に男の使い方が上手い。ま、スマスが単純なものもあるんだろうけど。

メリルがくすりと笑った。

「でも、面白そう。あたしも次回があるなら参加したいなあ。ね、レイラちゃん」

レイラ・キュイが無表情に頷く。彼女はアメリカ国籍のロシア人で、ブルースクエアでバーメイドをやっている。そして、メリルから店の用心棒を任されるほどの凄腕だ。

サーニヤに「お兄ちゃん、はやくっ！」と急かされ、思わず唸った。

何が欲しい？ と訊かれたところでピンとこない。ブルースクエアの貸切——は止めておこう。危険すぎる。レイヴンが睨んでるし、エルヴィの冷やかな笑顔も怖い。

あの二人にバレたら何をされるかわからない賞品はダメだ。さすがに命は惜しい。そうなるも他は……車でもいいか。以前のは壊れたままだし、手に入れば儲けものだ。

書き終えた紙を箱へ入れるなり、レイラが扇状に広げたトランプを向けてくる。

「これは？」

「ジョーカーを引いたら追跡者だ」

これがくじ引きか。ちらつと隣へ目をやれば、サーニヤが引き終えたカードを手待っている。レイラの手にあるカードは二枚、ジョーカーの有無は不明。彼女のポーカーフェイスから、それを確かめるのは難しい。仕方なく運任せで左から一枚引いた。

「スペードの7か。逃亡者みたいだな」

サーニヤが我事のように喜ぶ。

「お兄ちゃんも同じだね！」

「そうなのか？　じゃあ、一緒に頑張ろうな」

そうなると問題は残りの一枚だ。

レイラは神近へ紙と引き換えに最後のカードを渡す。神近はそれを確かめ、凶悪犯じみた笑みを浮かべた。最早、疑う余地はない。あの一枚はジョーカーだ。

「一番、鬼にしちやまずい人が鬼になったな……」

「まあまあ。そう悲観するもんじゃないぜ、親友。良いことを教えてやるよ」

スミスが声を潜め、

「くじ引きのランプだけだな、各スートの8からキングまでが抜いてあるんだ。ただ、どっかでダイヤを一枚落としまったみたいで……」

「適当に一枚足して二十八枚にしたのか？　それで？」

「そう急かすなよ。二十ドル紙幣の裏面を見たことはあるよな？」

現在、二十ドル紙幣には二人の肖像画が描かれている。

表面は奴隷解放を訴えた女性運動家、ハリエット・タブマン。裏面はデザイナーが一新される十年前まで表を飾ったアメリカ大統領、アンドリュー・ジャクソンだ。

「ん？ それが？」

「いや。それだけさ」

「なんだそりゃ……」

「ま、頑張って考えてくれ。これで公平にしたからな」

「公平に？ どういうことだ？」

直人の怪訝な顔へニヤリとするだけで、スマスは片手を振って背を向ける。まるで意味がわからない。それでも、くじ引きと何か繋がりがあることだけは予想がつく。

とりあえず、胸ポケットにカードを入れておいた。取っておいて損はないだろう。

紙の回収とチェックを済ませ、御堂とイレーナはルール説明を再開する。

『みんな、耳穴かつぼじってよおく聞くように！ 逃亡者と追跡者で勝利条件が全然違うからね？ まず、逃亡者は逃げ延びた人だけが賞品を貰えるよ！ 五人残ったら五人とも貰えるってこと。だから、逃亡者は全員、賞品ゲットのチャンスがある！』

『追跡者は最初の二名しか賞品をもらえません。なので、逃亡者の皆さんは捕まると賞品無しです。追跡者も全員捕まえないと賞品はありません。気をつけてくださいね』

その条件なら必死に逃げるし追いかける。ただ、途中で捕まった逃亡者のモチベーションが下がるのは否めない。そう思いきや、御堂が紙切れを手に片頬を上げた。

『ま、安心してよ。もし、途中で捕まっても追跡者が勝てば、ブルースクエアの女の子指名券（一回分）を参加賞でプレゼントするから。誰だって幸せになりたいよね？ なら、他人を引き摺り込んで、みんなで幸せになればいいじゃない！ あーっはっはっ！』

……あいつ、屈託のない笑顔で何てこと言いやがる。そりゃ、何もなしより参加賞でも貰えたほうがいい。そんな心理を利用して、逃亡者の士気を維持する魂胆のようだ。

『それじゃ、基本の説明はこれで終わり。質問がある人は手を挙げてよろしく』
エルヴィが真つ先に挙手した。

「翡翠。このルール7、どういう状況で誰が多数決を採るの？」

『そういえば忘れてたわ。イレーナ、メルルちゃん、レイラさん、スマス君の四人が本部に待機してるのね。それで、ルールに無い状況が起きたらジャッジするわけ』

彼女の説明をイレーナが引き継いだ。

『……例えばですが、罊を仕掛けた追跡者の方がいたとします。それに嵌った人へマークIを当てた場合は有効か？ そういうのを四人で話し合って多数決で決めるんです』

「その例だと判断はどのように？」

『そうですね……。たぶん、仕掛けた罊に致死性がなく、逃亡者にも目立った怪我がない場合は有効だと思います』

なるほど。ジャッジの基準は「致死性」にあるようだ。例え話の「罊」を装備の一種と見做すなら、使い方によってはルール4の「死人が出る装備」に引っ掛かる。

御堂は『他に質問は？』と見渡し、特にないことを確認してから頷いた。

Black Dogs EXTRA

『この後、通信機を各自受け取って、十時まで準備タイム！
界線を越えると通信機が警告音を鳴らすから気をつけてね』

現時刻は午前九時二分。

サバイバル鬼ごっこ開始まで、あと五十八分——。

ちなみに、フィールドは境

『Black Dogs 3』はC91 冬コミで販売！

『よろづ屋本舗』

C91 コミックマーケット

2日目 12/30(金) 西1ホール の - 08a

Black Dogs シリーズ既刊も販売予定！

※新刊をお買い上げの方にはオマケのポストカードが付属！既刊とセット購入で割引もあります！

Black Dogs EXTRA

発行者 よろづ屋本舗
<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>
yoroduyahonpo@gmail.com

著者名 黒ねこ作(@gretelproject)
<https://twitter.com/gretelproject>

イラスト 雪あられ
編集 黒ねこ作

これはサンプルです。完全版ではありません。

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複写(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。